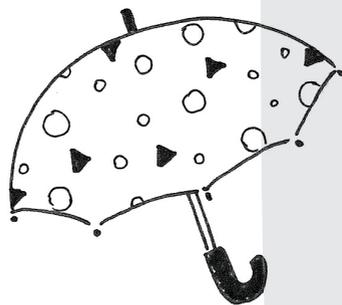
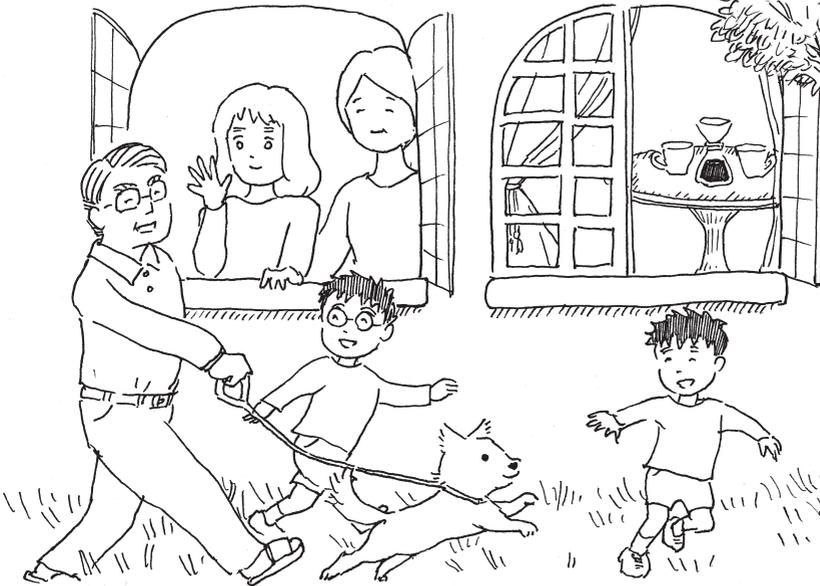
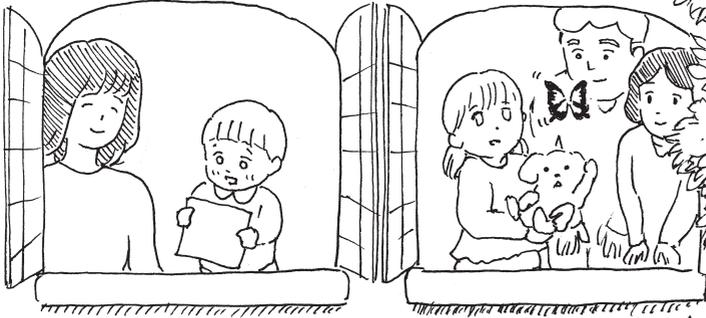
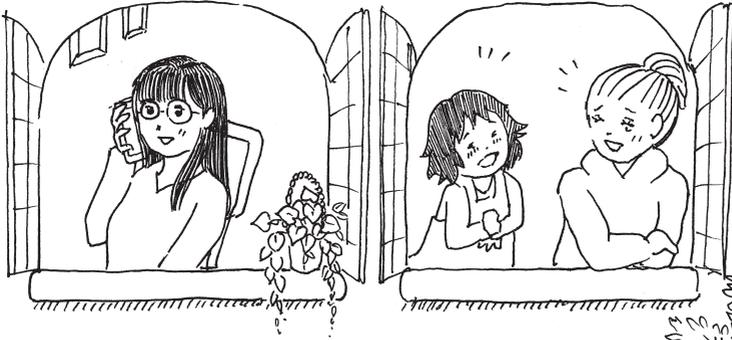


第 1 章

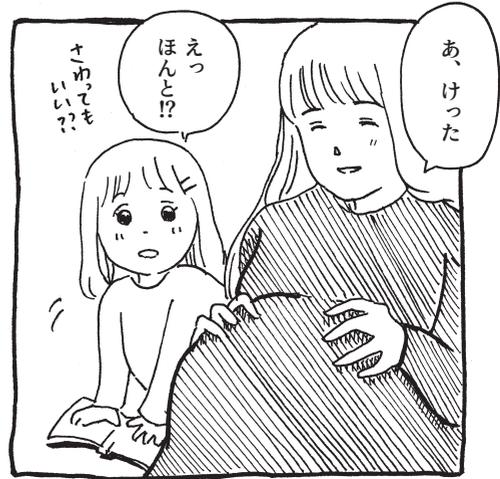
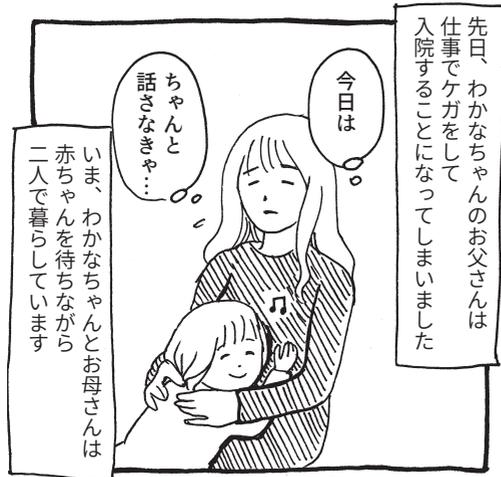
いろいろな
里親子の暮らし

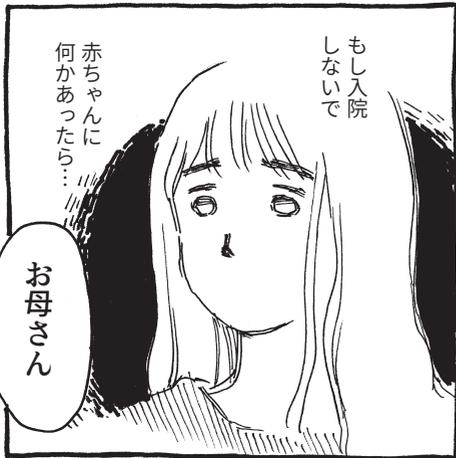


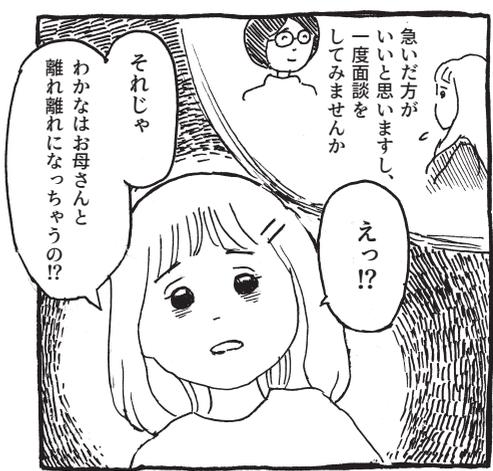
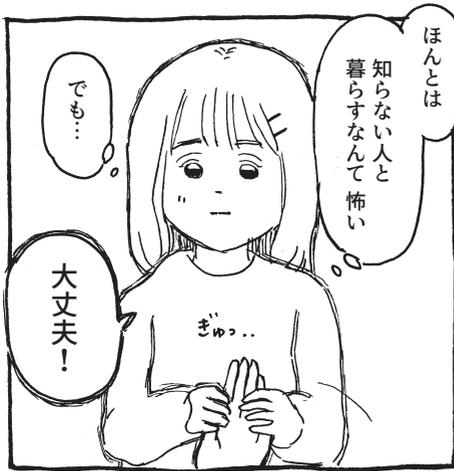
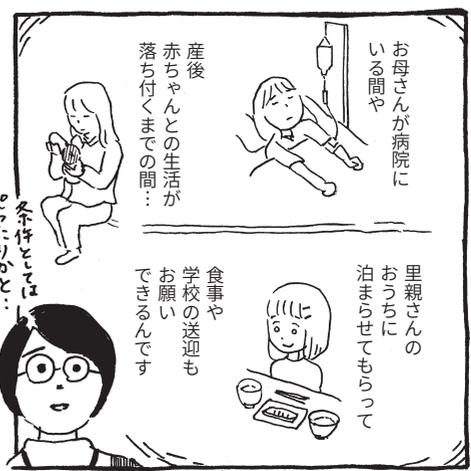
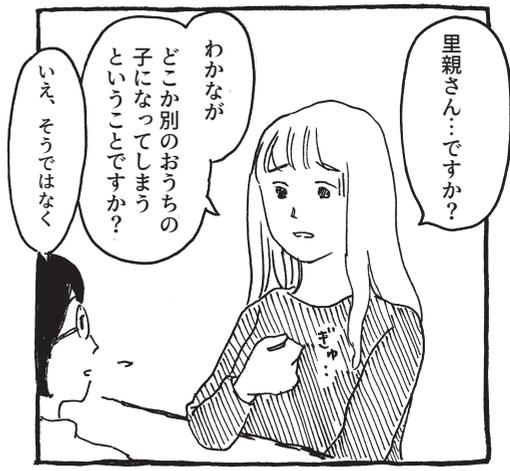
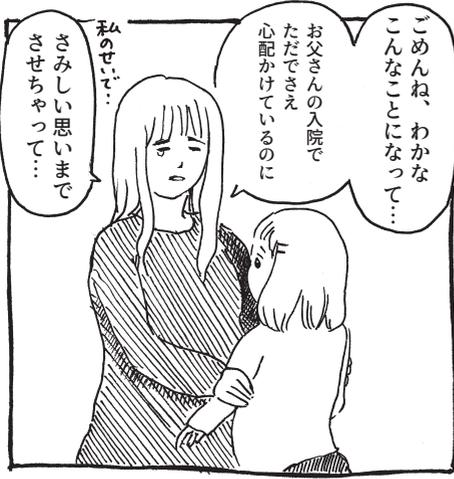


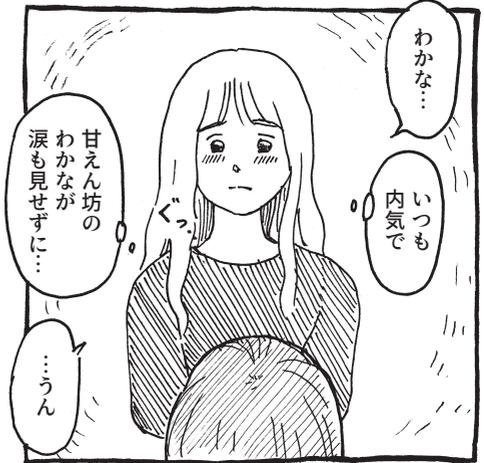
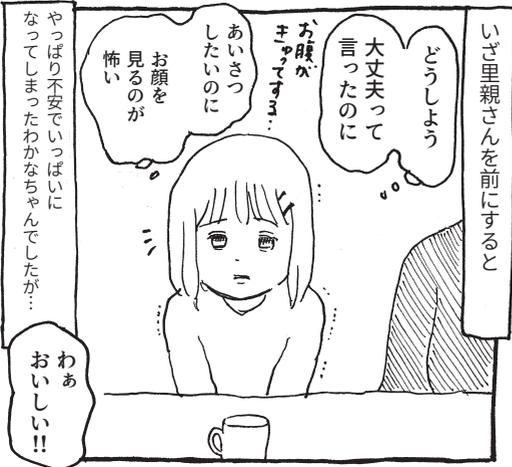


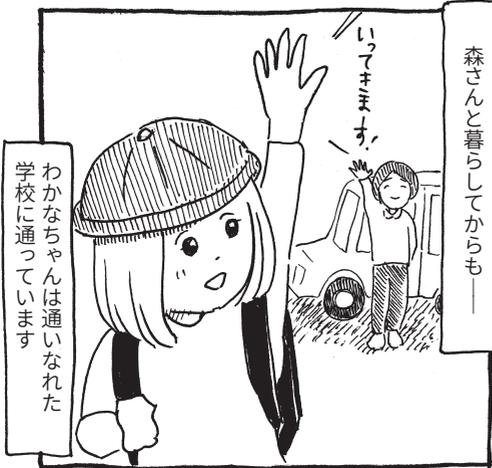
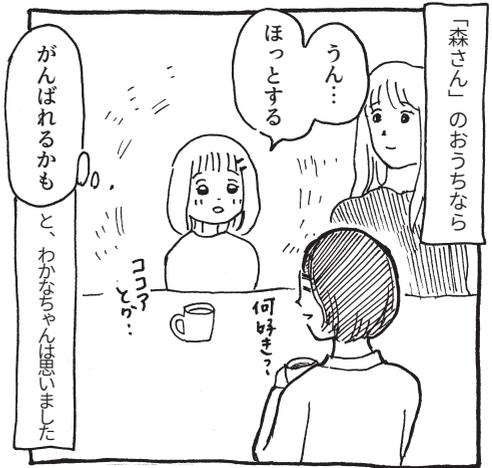
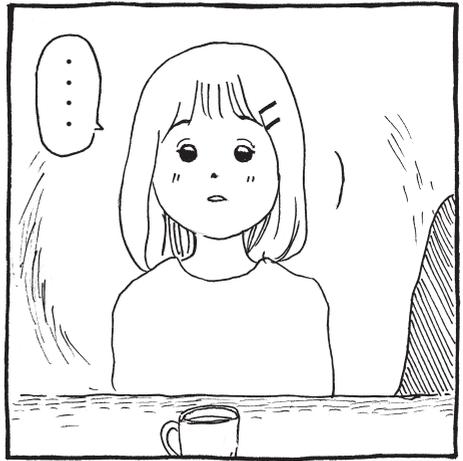
※ここから紹介する物語は、フィクションです。
実際のできごとを取材したエピソードに基づいて
いますが、登場する人物・団体・名称などは架空
であり、実在のものとは関係ありません。

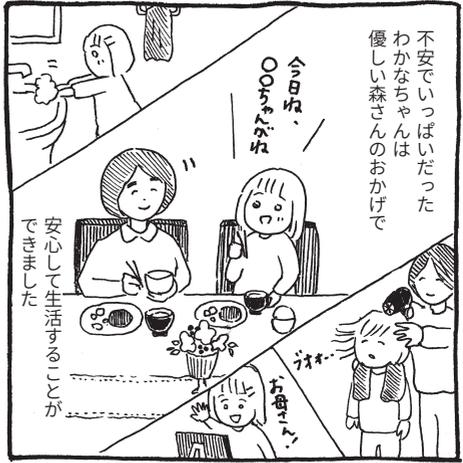
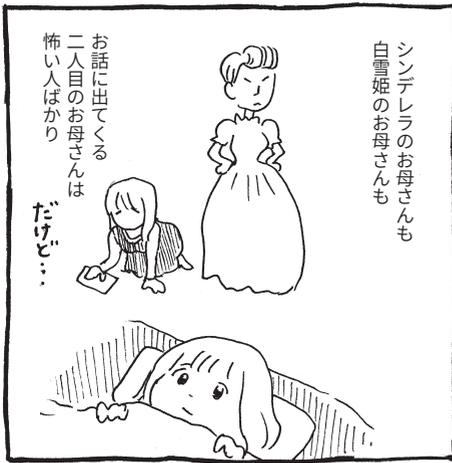


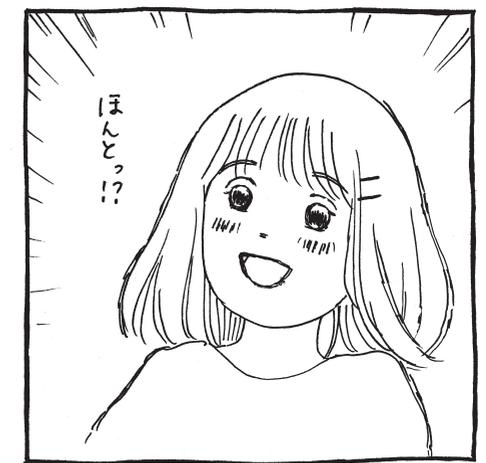
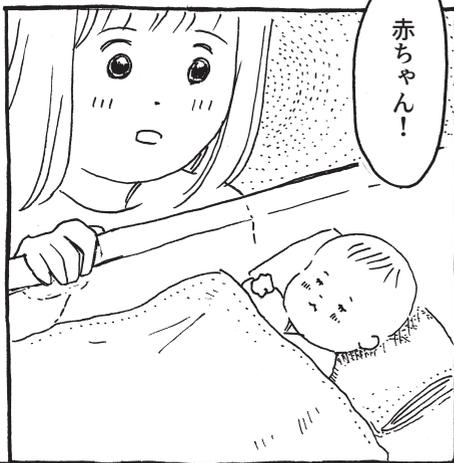
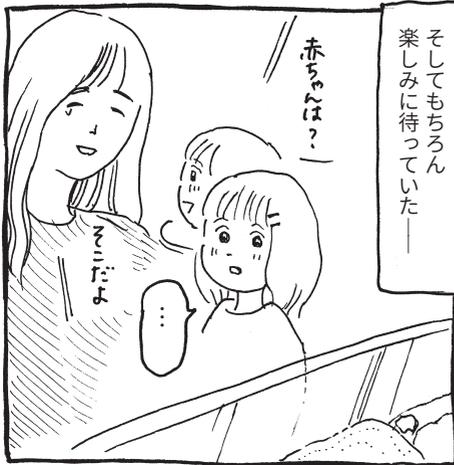
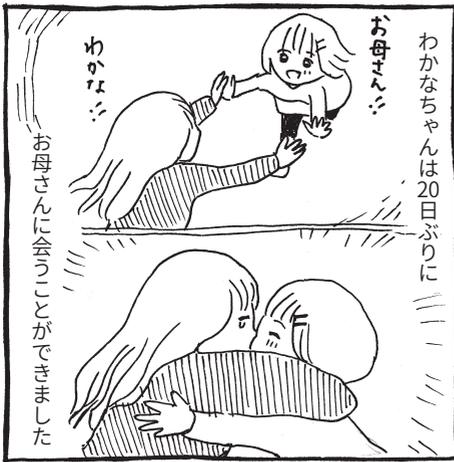


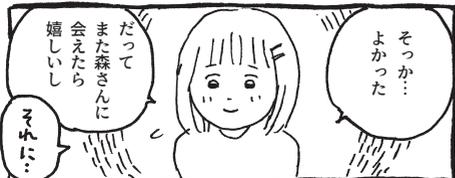
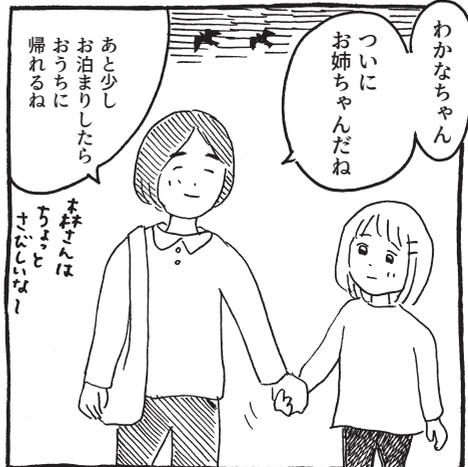
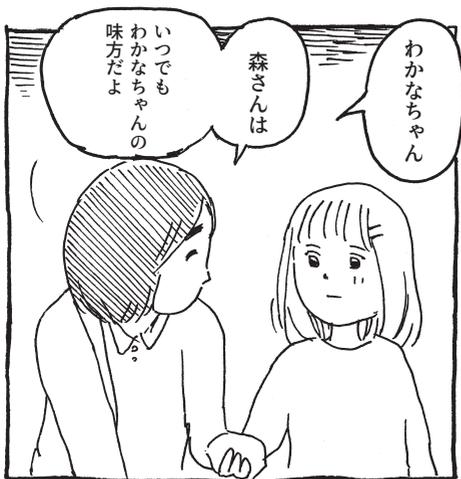












短い期間だけ一緒に暮らす

短い間だけの里親さん

里親というと、小さいときから大きくなるまで、長い期間子どもを育てるものだ、と思っ
ている方も多いかもしれませんが。

でも、出産で困っていたわかかなちゃんのご家庭のように、短期間だけ里親家庭にお世話になることや、緊急時の一時的な保護（一時保護）が必要な場合、一〜数週間だけ預かることもあります。

さらに近年では、数日間だけ子どもを預かってもらえるショートステイという制度に、里親を活用している自治体もあります。

ショートステイとは、入院や出産、冠婚葬祭や育児疲れなど、子どもを少しだけ預かってもらいたい……！ というときに使えるシステム。子どもを保護しなくてはならない、という特別な事情がなくても、家庭の状況に応じて利用できる制度なのです。

ショートステイに里親を活用しているかどうかは、自治体によって異なります。協力してく

れる一般家庭から募る場合と、研修を受けて里親家庭として認定・登録された家庭にショートステイを担ってもらう場合があります。

もとの家に戻るときにも

里親家庭で養育していた子どもが、実の親（生物学的な血のつながりのある）のもとに戻ることになったときにも、お世話になっていた里親家庭にショートステイをお願いしながら、少しずつ時間をかけて戻っていく、というパターンもあります。

いくらもとの家族のところに戻るとはいえ、数ヶ月〜一年という時間、離れて暮らしていたのです。「さあ、今日から一緒に暮らそう」といっても、子どもも親もお互いに難しいと感じることも多く、急ぎすぎると親子の関係が不安定になってしまうこともあります。

そうならないよう、週に一〜二日は里親家庭で過ごし、実の親が息つく時間を取りながら、少しずつ子どももとの暮らしに慣れていってもらう、というゆとりが必要になります。

そのとき、前にも一緒に暮らしていた里親家庭でふたたび過ごせれば、子どもも緊張や負担を感じず、リフレッシュしたりショートステイを楽しんだりすることができるでしょう。

一学区に里親家庭ひとつ

そう考えると、できるだけ多くの場所に、たくさんの里親家庭があるといいですね。一つの小学校の学区に里親家庭が一つはある、という状態を目指している自治体も多くあります。

里親家庭が必要になる状況は、多岐にわたるのです。預けられた子どもの負担をなるべく軽減できるよう、住んでいた地域とできるだけ近いところに里親家庭があったほうがよい場合もあります。子どもと親に物理的な距離が必要な場合には、遠くの里親家庭に委託するほうがよいかもしれません。

また、子どもの年齢や状況、それまで過ごしてきた家庭環境などから、どの里親家庭がぴったりなのか、配慮して選択する必要があります。つまり、多くの場所にたくさんの里親家庭があ

ると、子どものための選択肢が広がり、子どもたちが安心して暮らせるようになります。

ところで、実の親と里親の関係の作り方は、自治体によってさまざまです。わかちやんのように、児童相談所を介して実際に顔を合わせることがあれば、顔を合わせないように配慮している自治体もあります。

それぞれの家庭によって事情はさまざまなので、一概にはいえませんが、実の親と里親が顔を合わせ、子どもの情報をシェアすることでお互いに安心感が生まれることもあります。

実の親も里親も同じ子どもと向き合うわけですから、子育ての相談をしたり、励まし合ったりすることもできるでしょう。そして実の家庭に戻ったときには、地域のなかで里親が見守ったり、親子に助け舟を出したりすることで、子どもはさらに安心して過ごせるかもしれません。子どもがのびのびと過ごせる、そんな地域を作っていけたらと願っています。